

明治時代初期の横浜における 「寿地区」とキリスト教

— 《近さ》と《ねじれ》、《問題》と《修復》 —

At the beginning of Meiji era,
“Kotobuki district” and Christianity in Yokohama:
— Vicinity and Distortion, Problems and Restoration —

下村 優

Shimomura, MASARU

〈構成〉

- 第1章 本稿で用いる主な用語の説明
 - 第2章 《近さ》：隣り人であったことの説明
 - 第3章 《ねじれ》：離れていったことの説明
 - 第4章 《問題》：問題と考えること
 - 結 論 《修復》：「寿地区」に学ぶ《対話への意思》
- 最後に

はじめに

本稿は、明治時代初期（明治3年秋～10年夏）の横浜における「寿地区」とキリスト教について、《近さ》と《ねじれ》、《問題》と《修復》という構成で、考察したものである。

第1章 本稿で用いる主な用語の説明

始めに、本稿において使用する主な用語を説明する。

(A) 明治時代初期（明治3年秋～10年秋）

明治3（1870）年秋から明治10（1877）年夏のおよそ7年間を本稿

では「明治時代初期」と呼んでいる。この期間というのは、現在の横浜市中区山手町211番の地にアメリカ人のキリスト教プロテスタント、オランダ改革派宣教師サミュエル・ロビンズ・ブラウン（以下S.R.ブラウン）氏が家を建ててから、東京一致神学校と合併してブラウン塾を廃止するまでの期間である。

（B）埋地「寿地区」

現在と同様に、横浜市中区寿町と松影町の2つの町を合わせて「寿地区」と本稿では呼んでいる。

昭和30（1955）年代以降、「寿地区」は東京の山谷、大阪の釜ヶ崎と並んで、日本の3大寄せ場の一つに数えられ、日雇い労働者が多数集まる「寿（ことぶき）」として知られてきた。

もともと「寿地区」は明治時代の横浜の埋立地である「埋地七ヶ町」の一部であり、埋地の町の中でもっとも山手に近く位置する。明治3（1873）年秋に、23ヘクタールに及ぶ沼地埋め立て工事が始まっているが、それ以前は吉田新田の南一ツ目沼の沼地であった。沼地の埋立工事が竣功した明治6（1873）年春、「埋地七ヶ町」の他の町と同時に、寿町と松影町も共に命名され、現在に至っている。

（C）キリスト教

本稿では、キリスト教という用語を、明治時代初期の横浜における、日本基督公会、改革派・長老派、バプテスト派に限定して用いている。他の教派やカトリックについては本稿の中では触れていない。

（D）S.R.ブラウン

本稿はS.R.ブラウンを集中的に取り上げている。

横浜のキリスト教史研究者である高谷道男氏は「S.R.ブラウン博士の人格と信仰と英知の遺風はいつまでも日本のキリスト教会に香高く存続している。」¹と指摘した。また、「S.R.ブラウンの福音的精神

は明治、大正、昭和を通じ今もなお厳然として日本のプロテスタント教会の中に生きている。」²とも評している。S.R.ブラウンが現在に至る日本のキリスト教会に決定的な影響を及ぼしている、という点では同じ考えを持っている。S.R.ブラウンが聖書翻訳委員会委員長、第一回宣教師会議議長、ブラウン塾主催者を務めてきたことなど、その点だけ見てもS.R.ブラウンが果たした役割は大きく、その影響は広範囲かつ深い、といわなければならない。しかし、筆者は高谷氏の評価とは異なり、S.R.ブラウンの残した〈排除〉という決定的な負の遺産を本稿で論じる。

(E) 山手211番

現在の横浜市中区山手町211番のこと。S.R.ブラウンが、明治3（1870）年秋から明治12（1879）年秋にかけて、およそ10年間を自宅として、生活し活動した場所となる。

この場所で、S.R.ブラウンを翻訳委員会委員長として、新約聖書の翻訳作業が行われた。また、ブラウン塾を開講して、英語や神学を身につけようと志す学生たちが通った場所でもある。本稿では埋地「寿地区」と並ぶ重要な場所として取り上げている。

(F) 横浜バンド

本稿では、「横浜バンド」という用語について、本多庸一（後の青山学院院長）、押川方義（後の東北学院院長）、井深梶之助（後の明治学院総理）、植村正久（後の東京神学社創立者）の4名のことを指して用いている。4名とも日本基督公会のメンバーで、S.R.ブラウンが主催した英語教育・神学教育のための個人的な塾であるブラウン塾に一時期学んだ経歴を持っている。

例えば、片子沢千代松氏は「日本のプロテスタントの源流としてバラ、J.H.に導かれ、横浜に1872（明治5）年結成の日本基督公会のメンバー。（中略）この公会は、単純な福音主義の信仰に立ち、無

教派主義をとった。これが、いわゆる横浜バンドであり、この福音主義の精神は、のちにこの公会に加わった植村正久によって受継がれ、信仰の純粹性を保持し、教会中心の欧米の伝統的プロテスタントの道を進めている。」³と、日本基督公会のメンバーであったことを重視した定義をしている。本稿では、さらにブラウン塾のメンバーであることに重きを置いている。先の4名については「横浜バンド」の代表的な人物として、異論はないものとする。

(G) 亀の橋、車橋、中村川

本稿では亀の橋、車橋の周囲を「横浜バンド」の主なメンバーが暮らした場所として説明する。「亀の橋」は明治6（1873）年春、「車橋」は明治7（1874）年春に完成している。

亀の橋や車橋が架かる河川が、幅およそ30メートル⁴の「中村川」である。

(H) ジョナサン・ゴーブル、ネーザン・ブラウン

共にバプテスト派宣教師である。

ジョナサン・ゴーブル（以下、J.ゴーブル）は安政7（1860）年に来日した最初期の宣教師の一人で、S.R.ブラウンやヘボンらと共に神奈川の成仏寺に滞在した。明治4（1871）年に、ひらがなによって翻訳された『摩太福音書』（またいふくいんしょ）を出版した。日本で最初の翻訳聖書出版となる。

J.ゴーブルについては、川島第二郎氏の研究を参考にし、多くの示唆を得た。（例えば『ジョナサン・ゴーブル研究』（新教出版社 1988））本稿では、川島氏が触れることのなかったS.R.ブラウンの問題点と「寿地区」について論ずる。

ネーザン・ブラウン（以下、S.R.ブラウンと区別するため、ネーザン・ブラウンと表記する）は明治6（1873）年に来日し、横浜第一バプテスト教会の牧師に就任した。明治12（1879）年には、

日本で最初の新約聖書全和訳となる、ひらがなによる翻訳『志無也久世無志与』（しんやくぜんしょ）を出版した。

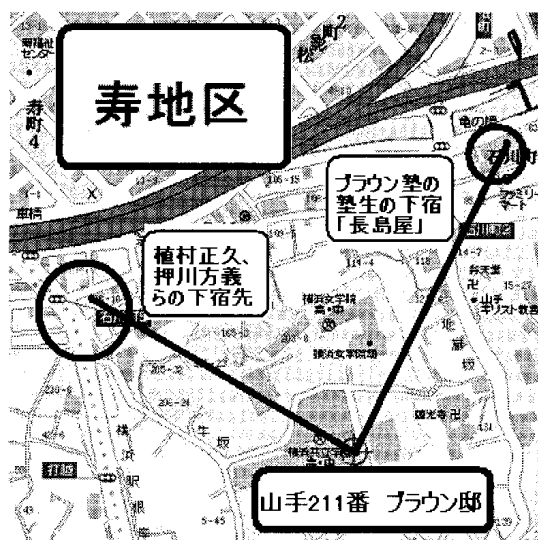
本稿では、S.R.ブラウンの活動を説明する上で、対立したバプテスト派の二人の宣教師として、二人の活動と方向性に触れ、紹介している。

第2章《近さ》：隣り人であったことの説明

本章では、「寿地区」とS.R.ブラウンと「横浜バンド」との《近さ》について説明する。

(A) 同じ空間：距離が近いことの説明

以下の図は、現在の地図⁵に「寿地区」と山手211番をポイントし、明治6（1873）年夏以降、ブラウン塾の開講後、「横浜バンド」の学生の下宿先を円で囲ったものである。



図「寿地区」－「横浜バンド」下宿先－山手211番

山手211番から「寿地区」との境になる中村川までの直線距離は約280メートルである。実際には山手211番は急傾斜の坂の上に位置するので、中村川に架かる亀の橋や車橋からゆっくり徒歩で登れば、およそ15分ほどかかる。「横浜バンド」の下宿先から「寿地区」までは実

際に歩いて、わずか数分である。幅30メートル弱の中村川に架かる亀の橋や車橋を渡れば、そこに埋地の町がある、という距離であった。

次の図は断面のモデル図となる。

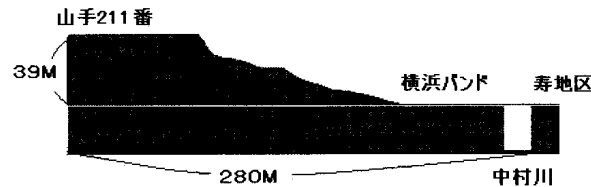


図 断面モデル図

目と鼻の先の《近さ》、同じ空間を共有していた、と指摘するのは、こうした理由による。

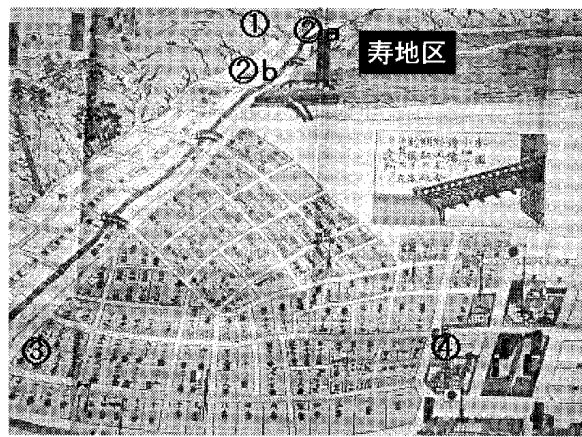
山手211番と「寿地区」については、場所の特定に議論の余地がないけれども、「横浜バンド」の下宿先については、様々なケースや例外があるので、最後にこの点の説明を加える。

<「横浜バンド」の下宿の位置についての補足>

以下の図は「明治六年（1873年）横浜明細之全図」（人文社）の一部である。

地図上の②aと②bの位置が「横浜バンド」の下宿、①は山手211番である。（実際はもう少し上の位置になる。この地図上では道もないため、ポイントを下にずらしてある）

地図上の③は長老派宣教師ヘボン邸、④は改革派宣教師ジェームズ・バラが仮牧師を務めた日本基督公会である。



図「明治六年（1873年）横浜明細之全図」（抜粋）

「横浜バンド」の学生は、少なくとも3つの場所に分かれて共同生活を営んでいたと考えられる。

中央の上から左斜めに流れる川が中村川（元町では堀川となる）である。途中から水平方向に右側に流れる川が派大岡川である。川が合流している地点に立っているのが製鉄所で、その後方と右側の黒く田んぼのように描かれているのが埋地である。ちょうど、製鉄所の後方が「寿地区」の位置となる。この地図は明治6（1873）年発行であるが、埋地は人の居住地のように記されていない。

本多庸一の記憶が確かならば、埋地と中村川の対岸の間にかかる亀の橋の、川下十件目の「長島屋」という宿屋（地図中②b）において、皆で共同生活をしたことになっている。

「然かし亀の橋の川下十件目位に長島屋と云つた古い宿屋を借り受けて皆んなで住んで居た。⁶」

井深梶之助の記録によると、植村正久は「車坂」の牛乳屋（地図中②a）に住み、二階を押川方義らに貸して下宿屋を営んでいたという。

「その頃植村は太田から車坂の牛の乳屋といふのへ移転して自宅の二階に押川その他の者を寄宿せしめ、下宿屋みたいなことをしてゐられたと記憶する。⁷」

指摘にある「車坂」は当時も現在も実在しない。開港資料館に保存される多くの地図にも記載がない。本稿では、以下の二つの理由から植村の自宅（下宿）の場所「車坂」について仮説を立てた。亀の橋の上流2つ目の橋に明治5（1874）年春に「車橋」が完成している。この「車橋」から山手に上る坂の名前が「牛坂」である。井深の記憶に残った「車坂」の「牛の乳屋」とは、現在の「車橋」から山手にいたる「牛坂」かその近辺の坂のことではなかっただろうか。牛坂を登りきった先は山手211番のS.R.ブラウン邸であり、通学には便利な場所である。このようにして、「車坂」の位置の仮説をもとに、植村正久と押川方義らの下宿先の場所を特定した。

「横浜バンド」の学生たちは、埋地「寿地区」と接して暮らし、平日は地図①のブラウン塾に学び、日曜日は地図④の日本基督公会の信徒として教会生活をおくった、ということができる。

少し離れて、埋地をはさんで反対側になる横浜末広町に、本多庸一は、郷里の津軽藩の若者三名と二階建ての一戸を借り受けて住んでいたようである。⁸ 末広町はこの地図には含まれない。埋地の右側に位置し、末広町から山手211番に通う際には、埋地の周囲を迂回するか、埋地を横断したと思われる。

また、井深梶之助は山手211番のブラウン塾内に住み込みで生活していた。⁹

学生の生活は多様であるから、以下に一例を示すことにとどめたい。

例えば、本多庸一は明治7（1874）年の暮れには、東奥義塾の塾頭として弘前に呼び戻されており、ブラウン塾にはわずか1年半しか在

籍していない。押川方義は明治9（1876）年に新潟伝道に派遣された。

植村正久は、ブラウン塾の学資のために自ら塾を開いて午後1時～10時まで50組を教え、その上で豚飼いもしたと回想している。¹⁰

学生たちのこうした生活上の個別の事情については、本稿ではこれ以上触れない。

（B）同じ時間：年代が一致することの説明

本稿では、すでに、「同じ空間」を共にし、目と鼻の先の距離で暮らした《近さ》を説明した。次に、「同じ時間」をともに過ごしていたことを説明する。

本稿が取り扱う、明治3（1870）年秋～明治10（1877）年夏の約7年間の範囲において、説明で引用する主な出来事だけを集めて、次の年表を作成した。特に重要と思われる出来事については文字を強調して目立つようにした。

| | 沼地一埋地「寿地区」／バプテスト派 | 改革派／長老派／横浜バンド |
|---------------|--|--|
| 1870 (M3) | 9.7 神奈川県と吉田家の間に沼地（面積23ヘクタール）埋立請負契約成立。 12 沼地埋立工事開始。 | 9 S.R.ブラウン、山手211番に移転。 |
| 1871 (M4) | バプテスト派宣教師、ひらがなによる翻訳「摩太福音書」出版。 | 横浜167番、バラ塾（ジェームズ・バラ）で聖書講義。 |
| 1872 (M5) | | 3.10 横浜167番に日本基督公会設立。 押川方義、本多庸一、バラより受洗。 9.20 第1回宣教師会議。 |
| 1873 (M6) | 4頃 沼地埋立工事竣工。県が買い上げ、埋地は官有地となる。 4 寿町、松影町等、埋地七ヶ町命名。亀の橋完成。 関内地区・相生町で大火、被災者に埋地の土地を貸付。 | 2.24 キリシタン禁制高札撤廃。 1 井深梶之助、S.R.ブラウンより受洗。 5 植村正久、バラより受洗。 8.1 ブラウン塾開講。 |
| 1874 | 5 車橋完成。 | 9 横浜第一長老公会創立。 |
| 1876 | バプテスト派宣教師、翻訳委員会離脱。 | |
| 1877 (M10) | | 夏 ブラウン塾、合併により廃止。 改革派・長老派による日本基督一致教会成立。 築地に東京一致神学校設立、「横浜バンド」のメンバーは移動。 |

明治3（1870）年秋から明治10（1877）年夏までの合計7年間、横浜において、「寿地区」とS.R.ブラウンと「横浜バンド」は、その成立と主な活動と成長過程において、一つの年表として整理することが可能であった。これが年代の一致と呼ぶ理由である。

次に、この年表において、重要な節目となる出来事がほぼ同時に起きていることを使って、更に年代を前期と後期の二つに分類する。

明治3（1870）年の秋、二つの出来事がほぼ同時に起きている。

- －S.R.ブラウンの山手211番への移転
- －沼地の埋立工事の開始

明治6（1873）年の夏、二つの出来事がほぼ同時に起きている。

- －ブラウン塾の開講
- －埋地工事の完成、寿町と松影町の誕生

このとき、前期と後期のそれぞれに、「寿地区」の人々、S.R.ブラウン、「横浜バンド」のそれぞれに対応するタイトルをつけたものが以下になる。

<明治3（1870）年秋～明治6（1873）年春>

沼地の埋立工事に従事した土木労働者の2年半

- －S.R.ブラウンを中心とした新約聖書翻訳、教会形成－
- －「横浜バンド」とキリスト教の出会い－

<明治6（1873）年春～明治10（1877）年夏>

埋地「寿地区」に移り住んだ庶民の4年半

- －S.R.ブラウンを中心とした新約聖書翻訳、教会形成、および、

「横浜バンド」への神学教育―
―「横浜バンド」が求めた神学と自立―

(C) 《近さ》：隣り人であったという結論

本章において、明治時代初期の横浜において、「寿地区」とS.R.ブラウンと「横浜バンド」とが、距離において近く、年代的に一致したことを説明し、同じ空間と時間の中にいたという筆者の考えを延べた。

この《近さ》を、別の表現で、「隣り人」であったと言い換えて、本章の結論としたい。

第3章 《ねじれ》：離れていったことの説明

前章で、《近さ》を説明し、三者が「隣り人」であったことを結論としたけれども、目の前の《近さ》にもかかわらず、「寿地区」から離れていく《ねじれ》について、本章では説明をする。

まず生活格差の一般的要因と考えられる「収入の格差」が当時のどの程度あったのかを明らかにする。

次に、前章において分類した、前期・後期の二つの分類を用いて、「寿地区」、S.R.ブラウン、「横浜バンド」の三者の間に生じた《ねじれ》について説明する。

(A) 圧倒的な収入格差

明治3（1870）年～明治10（1877）年当時のS.R.ブラウンと埋地「寿地区」の労働者の収入を比較してみる。

<月収800万円：S.R.ブラウンの収入>

明治3（1870）年8月から3年間はS.R.ブラウンは修文館で英語を教えたが、月棒は給料（当時の）250円と家賃（当時の）100円で

合計（当時の）350円であったと佐野誠吉氏は計算している¹¹。現在の貨幣価値に換算するにあたり、当時の1円＝現在の評価2万円として、およそ月収約700万円（現在の評価）¹²であろうというのが佐野氏の結論である。この計算に基づけば、修文館からの給料だけでもS.R.ブラウンは年間で8,400万円（現在の評価）の収入が保証されていたことになる。

井深梶之助はS.R.ブラウンの月給を（当時の）250～300円位であったと記録している¹³。また井深は、S.R.ブラウンが修文館を去るに至った理由として、契約期間の延長の際、この給料の減額が試みられたために、それを承知せず辞した、と記録している（注：P.82『井深梶之助とその時代』第1巻 明治学院 1969）。

S.R.ブラウン自身は、明治6（1873）年6月7日の書簡によれば、修文館を辞職した後、8月以降の俸給として年間で（当時の）2,200ドルをミッションに要請している。当時の交換レート（1ドル＝1円）に従えば、年間（当時の）2,200円、月額にすればおよそ（当時の）180円（現在の評価で360万円）となる。¹⁴

S.R.ブラウンは英語教育のため自宅でブラウン塾を始めるにあたって、学費を月額一人（当時の）10円、最低10名集めることを最低条件にし、開講当初の学生数は20名、と井深梶之助は記録している。¹⁵井深に従えば、毎月（当時の）200円（現在の評価で400万円）の収入をブラウン塾で得たことになる。ミッションからの年間（当時の）2,200ドルに、ブラウン塾からの（当時の）2,400円（12ヶ月分の月謝）を加えれば、年間（当時の）4,600円（現在の評価では9,200万円）の収入となる。ミッションからの給与を返還した可能性も考慮して、修文館からブラウン塾を通して、S.R.ブラウンの基本収入を現在の評価で月収700万円、年収8,400万円とみる佐野氏の説で問題はないように思う。

この他にも、聖書協会から聖書翻訳事業の働きとして翻訳委員には俸給が支払われた可能性が指摘されている。ヘボンの場合に

は1年で（当時の）1,000ドル（現在の評価で2,000万円）の俸給が打診されていた。¹⁶ 翻訳委員長を務めたS.R.ブラウンが聖書協会からの俸給を受け取らなかったとしても様々な役職を兼ねていたS.R.ブラウンには、これ以外の収入があったと考えるのが自然である。したがって、S.R.ブラウンの収入を多かったときで合計およそ年間1億円（現在の評価）、月収800万円（現在の評価）と推論しておきたい。

明治時代初期の山手211番において、S.R.ブラウンは、修文館英語教師、宣教師、英語塾教師、翻訳委員長などを兼ねることで、高額な収入が保証されていたと指摘しなければならないだろう。

<月収12万円：埋地「寿地区」の労働者の収入>

貨幣制度調査会報告による東京賃金比較表というデータがある。¹⁷（資料では「土方人足」という表現が用いられているが、本稿は「土木労働者」とする。）

明治6（1873）年の大工職人の日給43.3銭、土木労働者の日給23.0銭という統計値である。

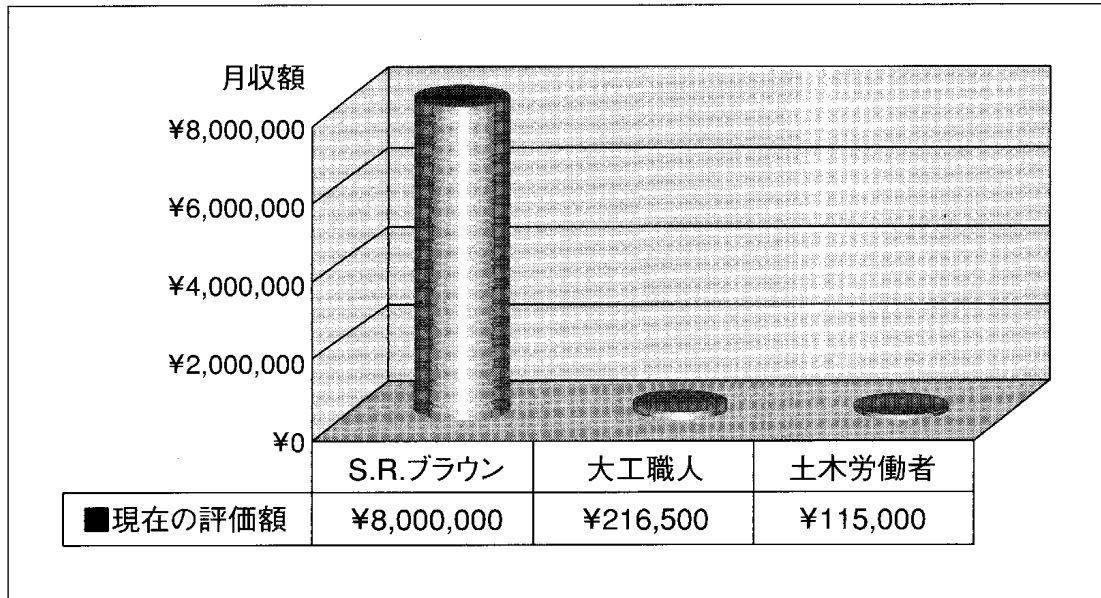
S.R.ブラウンの収入計算同様に、当時の1円＝現在の評価2万円とした場合、現在の評価で、大工職人の日給が8,660円、土木労働者の日給で4,600円となる。

最大で月に25日間働けた場合として、大工職人の月収216,500円、土木労働者の月収115,000円という月収額が算出される。

<およそ70倍の収入格差>

以上、S.R.ブラウンの月収を800万円（現在の評価）、大工職人の月収を21万6,500円、土木労働者の月収を11万5000円、と算出してきた。この収入格差の割合は、S.R.ブラウン：大工職人：土木労働者＝70：2：1となる。実に、70倍の収入格差である。

これだけの経済格差が、埋地「寿地区」の労働者と山手211番のS.R.ブラウンという、隣り人同士の間にあったのである。



収入の格差 <1>

<改革派宣教師フルベッキの存在>

一英語教師であるS.R.ブラウンの収入が労働者の収入の70倍にも達したことの背景として、同じ改革派宣教師フルベッキの影響を指摘しておかなければならない。

明治政府の要人となった、フルベッキは長崎から東京に拠点を移し、政府の高等教育機関のトップに登りつめた。明治5（1872）年9月～明治6（1873）年9月の段階で、第一大学区第一番中学校の教頭として、月給600円（現在の評価で1,200万円）¹⁸を支給されていた。年収1億4,400万円の給与である。政府の最高学府を任されたフルベッキと同じ改革派宣教師であるS.R.ブラウンが、ポストや待遇など様々な面で優遇されたことは言うまでもない。

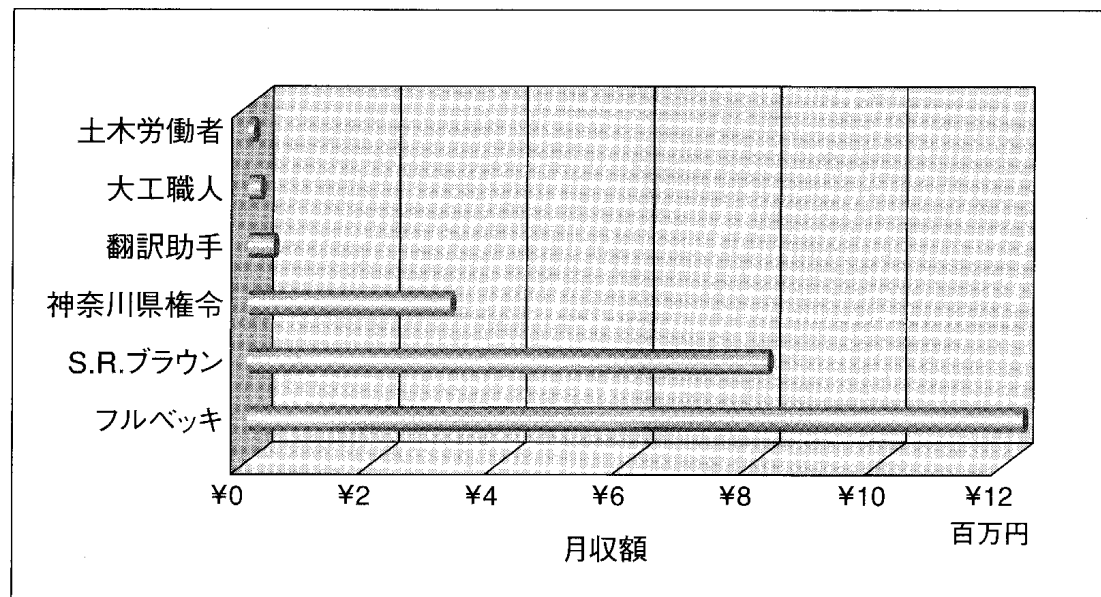
明治5（1872）年当時、神奈川県権令であった大江卓で、月給150円（現在の評価で300万円）である。¹⁹

翻訳助手を務めた高橋五郎（ブラウン塾に学びヘボンに雇われる）、松山高吉（D.C.グリーンに雇われる）は、月給20円（現在の評価で40万円）が支給されたことが、明治7（1874）年4月3日のブラウン書簡からわかる。

「昨日開かれた聖書翻訳委員会では、マクレー博士とヘボン博士の動議で、聖書協会からリフォームド・ミッションに与えられた割り当て金のうち、わたしと翻訳委員の助手として、もっともすぐれた日本人の学者を雇うため、240ドル、すなわち、一ヶ月、20ドルの金額を支出することを要求しました。」²⁰

原稿の筆写をした奥野昌綱には、月給16万円（現在の評価）が支給されたようである。

「わたしは1ヶ月約8ドルで翻訳の原稿を筆写するために、一人の日本人を雇わなければなりません。」²¹



収入の格差 <2>

改革派宣教師フルベッキとS.R.ブラウンが、日本人庶民と比較

して、いかに高額な収入を得ていたかが明らかであるだろう。フルベッキと労働者との収入格差は実に100倍に拡大する。

改革派宣教師S.R.ブラウンには、同僚フルベッキの人脈や圧倒的な経済力があつた。こうしたS.R.ブラウンの影響力が過小評価されるべきではない。

(B) 沼地の埋立工事に従事した土木労働者の2年半

明治3（1870）年秋～明治6（1873）年春、沼地「南一ツ目沼」の埋立工事が行われた。この工事の概要にふれた後、この期間のS.R.ブラウンと「横浜バンド」について、J.ゴープルの事例を通して、疑問点を提出する。

<埋立工事の概要>

沼地埋立工事の発端は、明治3（1870）年4月26日、井関神奈川県知事が出した「布達」に始まる。

「吉田新田地内の沼地およそ7万坪の埋立をする。埋立用土砂は、中村川から根岸村海岸まで掘割を開き、その残土をもって行ふべし。この事業を自費で引き受けるものにはこれを許可し其の所有を認める」²²

工事自体は開港場としての横浜における都市基盤整備を目的とした、沼地の埋立、運河の開削、波止場の建設工事であった。²³ 具体的には次のような内容になる。

- ① 掘割川の開削、及び中村川の掘り広げ
- ② 開削残土による吉田新田南一ツ目沼地の埋立と造成
- ③ 掘割川河口の滝頭に2条の突堤を持つ波止場建設

埋立工事は明治3（1870）年の秋に始まり、明治6（1873）年春に竣功した。埋地七ヶ町として寿町や松影町など7町名が間もな

く命名されている。埋地と既存の町をつなぐ「亀の橋」は明治6（1873）年春、「車橋」は明治7（1874）年春に完成している。

次に、この同じ期間における、山手211番のS.R.ブラウンの活動を説明する。

＜S.R.ブラウンを中心とした新約聖書翻訳、教会形成＞

埋立工事開始と同時期、明治3（1870）年9月1日、S.R.ブラウンは野毛の修文館で英語教師に就任、山手211番から教師として修文館に通い始めた。埋立工事の行われた丸2年半の間、S.R.ブラウンは沼地「南一ツ目沼」を迂回して通勤したことになる。

S.R.ブラウンと沼地埋立工事労働者との《ねじれ》について、バプテスト派宣教師J.ゴースルに対する文章を用いて、説明したい。

S.R.ブラウンの書簡には、いくつかJ.ゴースルに対する痛烈な批判が残されている。次は慶応2（1866）年7月2日の手紙からの引用である。聖書翻訳に関する対立から、J.ゴースルの宣教師としての資格さえ認めない、というほどの激しい調子の手紙である。

「聖書翻訳の共同事業に関して、バプテストの同労者とのいきさつを除いては、なんら困難がありません。あなたとわたしの間の、ごく内密な話ですが、バプテスト宣教師と称するゴースル氏は、宣教師というほどの人物ではありません。ここへ来てから、生活を支えるためと、負債を払うために、あらゆる種類の仕事をしています。現在、午前九時から夜おそくまで、建築家に雇われて、建築作業の監督をやっています。そのほか、聖書翻訳者として、自分ではたいそう自負していますが、十分な教育がありません。彼は無学な民衆と、いつもいっしょにいたので、かなり適任だと、自分では考えているようです。ギリシヤ語もヘブル語も読めません。平凡な少

年時代から、一般の英語をしゃべり、普通教育を受けただけで、妻と幼児とを連れて、ハミルトン大学にゆき、四年間、そこでがむしゃらに勉強してから、フリー・バプテスト派の宣教師として、ここにやって来たのです。わたしは、ゴープル氏のためにつくしたいのですが、しかし、ここでは外国人にも日本人にも、善良な人物として尊敬されていません。同氏は、はげしい気質の人で、多くの日本人をげんこでなぐり、婦人たちまでなぐったのです。正直な話ですが、自分の妻君さえ、たびたびなぐったのですから。同氏は、わたしたちの聖日礼拝に、たまにしか出席しませんし、祈祷会には一回も出たことがありません。こういう人物といっしょに働くことはとてもできません。ゴープル氏が困っていた時には、たびたび世話もしたのです。生活費がなかった時など、数百ドル貸したこともありました。それに、わたしは、同氏の敵ではありません。ただ、聖書を日本語に訳すという、大いなる難事業に、わたしたちが、こういう人と協力しないからといって、ミッション本部で、わたしたちを非難したりしないでいただきたいために、同氏についてわたしがいったことは、適当でかつ必要な処置であると感じている次第です。ヘボン博士も、この問題に関し、わたしが申し上げたことについて、支持してくれるでしょう。同博士が、まだその事を報告していないとしても、いずれは博士も、ミッション本部にそう伝えられると思います。ヘボン博士は、ゴープルとの協力を考えているかもしれませんが、しかし、わたしたちは、今でも、この試みがわたしたちに、ただ害となる、否、分裂を生ぜしめるのはわかっています。最もりっぱなバプテスト宣教師でも「浸礼」のことになると、しつこく固執し、その点で分裂し、おのおの異なった聖書の翻訳をするようになります。中国においても同様でした。ここでも、そうなるでしょう。わたし

たちの油は、バプテストの水とは、どうしても混ざりません。どうぞ、このことだけは覚えておいてください。ごく、内密に申し上げたのです。ゴープル氏と共同して翻訳事業をやれと主張されるようなことでもあるといけないと思って、あらかじめ、分裂を警戒していただきたいと思っただけです。共同事業など不可能なことです。」²⁴

ここでS.R.ブラウンは、聖書翻訳をJ.ゴープルとは共にできないことを主張している。「浸礼」という訳語での一致の困難さという点のほかに、拒絶の理由を挙げる中で、学歴、性格、民衆との生活や労働、などを根拠にJ.ゴープルの宣教師資格を疑い、聖書翻訳に不適格とする。J.ゴープルは事実、博士号を持っていないし、温厚で穏やかな人物ではなかったかもしれない、旧士族でない労働者や庶民とともに労働し、日常生活とともに過ごしていたと思われる。しかし、J.ゴープルが民衆の中で、民衆の言葉で聖書を翻訳しようと考えたこと自体は、むしろ極めて重要な点であると思う。この点の解明とJ.ゴープルへの偏見の解放において、川島第二郎氏の果たした役割は決定的であった²⁵。

結果的には、S.R.ブラウンに先立って、明治4（1871）年秋にはJ.ゴープルは民衆に読めるひらがなを使って、日本で最初の翻訳聖書『摩太福音書』を出版するに至った。出版後、その実績をともなって、翻訳事業への援助を求めてアメリカに一時帰国をしている間、明治5（1872）年春には、日本基督公会が設立され、秋には第1回宣教師会議が開催されていた。ここでは、重要な三つの事柄が決定されている。①聖書翻訳の共同委員制、②教派によらない日本基督公会の徹底、③神学教育の一致、がそれである²⁶。S.R.ブラウンは第1回宣教師会議の議長を務め、新約聖書翻訳委員社中の委員長に就任した。バプテスト派J.ゴープル不在の中、S.R.ブラウンと同じ改革派宣教師であったジェームズ・バラを仮牧師とする日本基督公会を中心に、

「公会」という教派を超えた教会一致運動が始まり、S.R.ブラウンが新約聖書翻訳委員の委員長として選任されていくのは、J.ゴープルにとっては納得できなかったであろう。翻訳委員会委員長であり、圧倒的な経済力を持っていたS.R.ブラウンがJ.ゴープルとともに翻訳事業を進めることができたなら、J.ゴープルの生活も活動も破綻することとはなかったであろう。同時に、J.ゴープルの翻訳事業での孤立と挫折は、労働者とともに生活し労働者の読める聖書を提供するという方向性の挫折でもあった。これは川島第二郎氏がすでに研究において明らかにした重要な指摘である。

<「横浜バンド」とキリスト教の出会い>

「横浜バンド」の学生は平日、修文館やバラ塾で、それぞれS.R.ブラウンとJ.バラから英語教育を受けた。

明治6（1873）年2月24日の「キリシタン禁制高札撤廃」に先立って、明治5（1872）年春には、横浜居留地167番にJ.バラを仮牧師として日本基督公会が設立された。押川方義、本多庸一、井深梶之助、植村正久ら横浜バンドのメンバーは相次いで信仰を告白し、J.バラやS.R.ブラウンから洗礼を受けた。設立当初から日本基督公会の中心メンバーとなり、教会一致運動や聖書翻訳など、S.R.ブラウンとJ.バラの活動に力を尽くした。

「横浜バンド」とキリスト教との出会いは、英語教育をきっかけにして、改革派宣教師J.バラとS.R.ブラウンとの出会いであったと言い換えてもよいであろう。学生たちに対する二人の影響力は絶大であった。

<前期2年半の関係>

J.ゴープルにおいて労働者への福音伝道の方方向性や接点を見出さうる反面、S.R.ブラウンにおいては、むしろ、労働者から離れていったことを指摘しなければならない。このことも、戦略的な

帰結であった。すでに、10年以上前に、来日2年目の1861年の時点で「ヘボン博士もブラウン師も、わたしも、いな三人とも現在では、聖書の日本語訳はその真理と、日本人の四分の一位の、教育ある階層にすなわち漢文の聖書が読める程度の人々にしか理解されないと思います。」²⁷とフルベッキは語っている。「宣教は高い社会階層の人々から始めるべきである」と²⁸。

(C) 埋地「寿地区」に移り住んだ庶民の4年半

明治6（1873）年春～明治10（1877）年夏、埋地の成立初期の概要から、この期間のS.R.ブラウンと「横浜バンド」について、どのような交流がなされたかに視点を置いた説明を行う。

<埋地・樺太：被災移民、土木労働者、港湾労働者>

明治6（1873）年春、工事の完了した埋地が当初、人の住めない土地として「樺太（からふと）」と呼ばれたと記録にある。

「さあそれで埋地は出来たが住む人がなくて樺太と言って居ました、今の様に四方に橋が無かったから、住うとしても不便で仕方がない、暫くは空地の儘で放棄てありました」²⁹

同じ明治6（1873）年、関内の相生町から出火した火事で関内の太田町が焼け野原になり、その避難場所として被災者に神奈川県は埋地の土地を貸し出している。

「明治六年相生町から出た関内の大火事で、樺太にも愈々住む人があるようになった」³⁰

同じ明治6（1873）年、現在元町トンネルのある場所、大丸谷に要蔵部屋が移動したという記録がある。鈴木要蔵による太田町

1丁目、海岸通りにあった人足の集会所³¹で、太田町では数百人の人足が集まって朝から晩まで博打がなされ、公許の大賭場のようであったという。この鈴木要蔵という人足受負貸頭（にんそくうけおひかしがしら）の賭場は「濱の要蔵部屋と言えは関八州誰知らぬ者なき有様となりぬ³²」と伝えられていたらしい。賭場は禁じられたため人足集合所を作ることはもはやできず、人足は主に埋地七ヶ町周辺の小部屋で分散して暮らしたという（本段落では、引用資料の表現にあわせて「人足」という用語を用いた。現在は、差別語である。）。

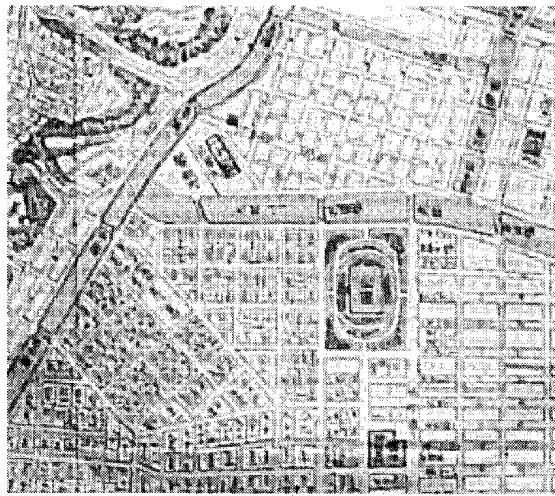
すでに横浜の開港直後、安政7（1860）年3月に、「元町と堀川」の工事の頃には、埋地の近辺に大規模な労働者の集落が形成されていた。『横浜元町140年史』は工事について次のように説明する。

「幕府はこの工事のために総工費一万両以上、人夫3,000人以上を投じた。人夫の日当は250文から300文が支払われ、当時としてはこれは破格だったという。かれらの多くは、元村の西側の谷土地につくられた貸長屋に住んだ。いまでも残っている「土方坂」（土方谷）の呼び名はそのときの名残である。」³³。

土木労働者3,000人のうち、多くが、「土方坂」の貸長屋に住んだとあるが、「土方坂」はフェリス女学院本部に登る西野坂の途中、右手に分岐する坂である³⁴。3,000人というのは現在の寿地区の人口の半数に該当するが、坂の名前として「土方坂」が現在まで残っていることから、長い期間にわたって相当数が定住したであろうことが想像できる。また、「土方橋」という地名も大正中期まで港湾労働者が集合する場所として残っている。植村正久らの下宿した車橋の上流1つ目の東橋のことである³⁵。港湾労働者も埋地に集住していたことを示している。

過酷な工事の末に完成した埋地には当初、被災者や土木労働者、港湾労働者、いわば社会的経済的弱者が最初に移り住んだことがわかる。

以下は「明治十年（1877年）改正横浜分見地図」の一部である。明治10（1877）年には、現在の「寿地区」同様の市街地としての区画が整備されている様子を知ることができる。



図「明治十年（1877年）改正横浜分見地図」部分

<S.R.ブラウンを中心とした新約聖書翻訳、教会形成、および、「横浜バンド」への神学教育>

明治6（1873）年夏、S.R.ブラウンは修文館を辞めて、山手211番の自宅で塾を主催した。4年半続くブラウン塾である。

S.R.ブラウンはこの期間の前半、公会主義に基づく教会形成、聖書翻訳、神学教育の3つ全てにおいて重責を担っていたことになる。

しかし、教会一致を目指す公会主義という理想は、明治10（1877）年にはすでに後退した。この年、改革派・長老派による日本基督一致教会が東京で成立しているが、これが公会主義の結果となった。

同時期に、改革派・長老派の神学専門教育を目的として、築地に東京一致神学校が設立された。横浜における日本最初の神学教育の場としてのS.R.ブラウンによるブラウン塾は東京一致神学校に合併され、その役割を終えて廃止された。

この時期後半のS.R.ブラウンとは、公会主義に基礎を置く教会形成、神学教育の二つの理想に反して、改革派・長老派による日本基督一致教会、一致神学校設立という、次の世代への引継ぎ役を果たした。

しかし、ここで再び、バプテスト派の主張する、民衆に読めるひらがなを使った翻訳という方向性が失われる出来事が生じている。バプテスト派の考え方は、J.ゴープルの時も同様に、聖書翻訳は誰のためのものか、という点で、多くの人が読める、わかりやすい聖書の提供、を重視するものであった。ネーザン・ブラウンが、明治9（1876）年の9月に、翻訳委員会を離脱したのである。彼もJ.ゴープル同様に、ひらがなを使った翻訳の方向性を示していた。

翻訳委員会の委員長であったS.R.ブラウン自身、先に引用した彼の書簡の中にあるように、ネーザン・ブラウンとの「洗礼」をめぐる訳語の衝突を早くから想定していた。宣教師に一般投票を行った結果、46名中30名が「洗礼」でなくても良いとする回答を得ていたにも関わらず、結果的にネーザン・ブラウンは離脱を余儀なくされた。主張した「しずめ」でなく、妥協案の訳語「バプテスマ」が勝利したことに満足できなかったためと言われる³⁶。S.R.ブラウンの想定どおり、翻訳をめぐるバプテスト派と再び衝突し、結果的に再び離れていくことになった。単に訳語だけでなく、訳語選定のプロセスと不信感が背後にあると思われる。宣教の対象として、埋地「寿地区」の労働者を明確に視野に置き、彼らのための翻訳を目指したのは、むしろバプテスト派であった

と言ってよい。再び聖書翻訳委員会は、ひらがなを使った翻訳聖書という方向性を持ったバプテスト派宣教師ネーザン・ブラウンを失ったのである。離脱後、ネーザン・ブラウンは、明治12（1879）年に個人訳として、ひらがなによる新約聖書全和訳「志無也久世無志与」を出版した。

すでにJ.ゴッブルを徹底的に否定し排除したS.R.ブラウンの手紙を紹介したけれども、再度のネーザン・ブラウンの離脱という出来事は、教会一致の公会主義を理想に掲げるS.R.ブラウンに対して、根本的な疑問を抱かせる。

<「横浜バンド」が求めた神学と自立>

明治10（1877）年、井深梶之助、植村正久らはブラウン塾から東京一致神学校に移り、改革派・長老派による神学の専門教育を受ける道を選び取った。翌明治11（1878）年、彼らは東京一致神学校を卒業し、牧師に就任している。ブラウン塾から東京一致神学校に移動してわずか一年で卒業、牧師に任じられたということから、井深や植村がブラウン塾で受けた神学教育が、改革派・長老派の中で極めて高く評価されたことがわかる。一時期をブラウン塾で学んだ、本多庸一（後の青山学院院長）、押川方義（後の東北学院院長）、井深梶之助（後の明治学院総理）、植村正久（後の東京神学社創立者）ら「横浜バンド」のメンバーが、それぞれミッションスクールの責任者として活躍していく上で、ブラウン塾の教育は本当に教会一致の公会主義に立っていただろうか。

<後期4年半の関係>

翻訳委員会の「訳語」の対立という理由で、バプテスト派宣教師ネーザン・ブラウンをこの時期、再び失ったことは、教会一致運動の中にあって、再び、埋地の庶民や労働者との接点を失った、と指摘せざるをえない。隣り人から離れていくという《ねじれ》

が、再び繰り返された。これが結論である。

(D) 《ねじれ》：離れていったという結論

本章において、筆者は、明治時代初期の横浜において社会経済的な格差の上で、S.R.ブラウンが、埋地「寿地区」の労働者や庶民が読める、ひらがなを使った翻訳聖書という方向性との対話に失敗したことを説明した。

教会の一致、神学教育の一致という理想が短期に失われ、改革派・長老派の一致に変わっていくことを述べた。

そして、隣接する埋地「寿地区」の労働者からS.R.ブラウンと「横浜バンド」が離れていくという《ねじれ》として結論づけた。

隣り人以外に、聖書翻訳は誰のためのものか、教会は誰のためのものか、神学は誰のためのものか、という疑問がここでも残る。

次に、この《ねじれ》から生じた疑問について、本稿は問題点をさらに論じることになる。

第4章《問題》：問題と考える《排除》

本章では、前章で指摘した三つの疑問が、どのような問題であるのか、説明を加える。

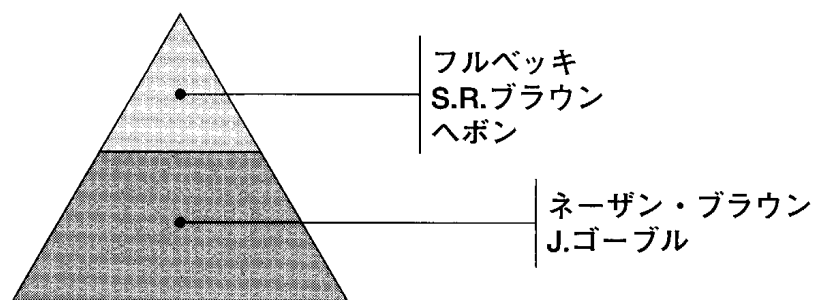
(A) 聖書翻訳は誰のためのものか

バプテスト派宣教師J.ゴープル、ネーザン・ブラウンの二人とS.R.ブラウンが、翻訳事業において、対立して離れたこと、ひらがなによる翻訳の方向性が失われたことを、《ねじれ》を説明する事例として前章で指摘した。訳語についても川島氏はJ.ゴープルの見識に注目し、以下の指摘をしている。マタイ9章10節の「取税人」を被差別的階層名の「穢多」とした³⁷。また、マタイ20章のブドウ園の労働者のたとえにおいて、労働者を「ひよう（日

雇い)」と訳出した³⁸。

J.ゴープルは労働者と共に働きながら言葉を覚え、労働者が理解できる訳語を用いた。J.ゴープルはむしろ当時の日本人の多数者、旧士族階級や新しい知識階級以外の庶民、に焦点を当てたのである。山手211番のブラウン邸の下に広がる埋地の労働者と接点を持ちえたのはJ.ゴープルであった。

次の図は、すでに引用したフルベッキの四分の一の高い社会階層を宣教対象にするというモデルを示したものである。



社会階層と宣教対象

長老派宣教師ルーミスが、S.R.ブラウンが実はヘボン訳の改訂を手伝ったに過ぎないと、書簡で報告している。³⁹ 翻訳委員会委員長であるS.R.ブラウンはほとんど実際の翻訳に携わっておらず、ヘボンの訳に手を加えたに過ぎない、というのである。明治7(1874)年1月22日の手紙でヘボンは次のようにS.R.ブラウンの遅れを書いている。

「ブラウンはルカ伝の私訳を校閲するのに一ヵ年以上かかったのです。こんなようにやっていると聖書の完訳は非常に長引くのではないかと思います。(中略) わたしどもが警戒していないとバプテストが先を越すでしょう。」⁴⁰

ヘボンがしびれを切らして個人訳を検討する一年前のS.R.ブラウンの書簡には、「わたしは、この漢字全廃、かな使用論者です。」

という報告が残っている⁴¹。彼の真意が何であったか、翻訳委員長として適任であったかは本稿では問わない。少なくとも、S.R. ブラウンが眼下の埋地「寿地区」への視点を持ちえたならば、直接ひらがな訳に舵をきらないにしても、バプテスト派宣教師が委員会を離脱しないですむよう、委員長としての役割を果たすことができたはずである。《近さ》と《ねじれ》の中で、この問題を考えるとき、それは山手211番の眼下にある埋地と庶民を切り捨てていくことと重なる、隣り人である労働者の《排除》という質の問題であるという結論になる。

(B) 教会は誰のためのものか ―公会主義という理想―

改革派のS.R.ブラウンやJ.バラが中心となった教派を超えた教会一致運動である「公会主義」という理想も、残念ながら、当初から矛盾の上にたっていたことが指摘されなければならない。教会一致を掲げながら、S.R.ブラウンの書簡では、改革派ミッションが日本におけるプロテスタントの中心であろうとするための宣教師派遣要請が、繰り返されている⁴²。

最初の日本基督公会の仮牧師は、同じ改革派のJ.バラであった。宣教師会議・翻訳委員会・神学教育のいずれにしても、改革派S.R.ブラウンが結果的に全ての責任者を兼ね、指導するという関係の中においては、諸教派との交流や関係はやがて後退し、徐々に公会主義の理想のほころびが明らかになっていった可能性は否定できない。

二人のバプテスト派宣教師の孤立を、バプテスト派教会形成の視点から言い換えると次のようになる。教会一致主義を掲げる翻訳委員会の聖書が特定の階層にしか読めないものである以上、庶民への宣教を目指すバプテスト派にとって、それは相容れないものとなる。皮肉なことであるが、日本人の多数である庶民への宣教を指向するならば、S.R.ブラウンが考える公会という理想から離れていかざるを得ない、という《ねじれ》状況である。

居留地の一等地である横浜167番に建つ日本基督公会が、旧士族階級や新しい知識階級に向けて宣教を行う教会であるならば、埋地「寿地区」の労働者や庶民のための教会とは、日本基督公会ではなかったはずである。

教会一致とはそもそも異なる教派が前提であるのだから、異なる立場をひとまず受け容れ、異なる意見と対話をするという前提が不可欠な条件であるだろう。同様に、もともと文化も言葉も異なるキリスト教と埋地の労働者が接点を持つとすれば、なおさら、多様性を受け入れ、対話する姿勢が不可欠であったはずである。むしろ、そこから学ぶことが必要と言えよう。

「横浜バンド」の目と鼻の先で暮らす人々にとって、離れていく、敷居の高い教会とは何であるか、それが本章での「教会は誰のためのものか」という問いである。

幸いにも、埋地「寿地区」に横浜バプテスト教会自体が移転し、現在もそこに教会があるという事実は、J.ゴースルやネーザン・ブラウンの目指した方向性が実を結んだと解釈することができるだろう。しかし、もし仮に、公会主義を掲げたS.R.ブラウンが彼らと共に歩むことができたとすれば、J.ゴースルの生活は救われただろうし、公会主義の実質化は漸進し、隣り人としての労働者層との関係も、日本のキリスト教のあり方も大きく変わっていただろうと筆者は考える。

日本人のための教会形成にとって、二人のバプテスト派宣教師の孤立によって、失われたものの価値は極めて大きいと考える。

(C) 神学教育は誰のためのものか

すでに説明してきたように、日本における神学教育が、埋地「寿地区」からわずか数分の場所で開始されたこと、学生である「横浜バンド」が埋地「寿地区」の目と鼻の先の距離で暮らしていたこと、これらのことは、ブラウン塾の神学教育を考える上で

必要な、前提になる事実認識である。

「横浜バンド」のメンバーは、ひとりひとり間違いなく埋地の労働者や庶民の暮らしと接点を持っていたはずである。

こうした状況を抑えた上で、S.R.ブラウンが学生に伝えたことの断片を記録から見てみたい。

井深梶之助は大正11（1922）年、日本基督教会創立第五十年記念講演会において、S.R.ブラウンについて次のように語った。

「氏は自己の使命を深く信じる所があつて、常に我等門下生にあたって申されたのには、只一人のブラオンが日本人に伝道するよりも二十人のブラオンを造る方が、遥かに大なる事業ではないかと。」⁴³

広く知られている、この記録をどのように理解すべきであろうか。S.R.ブラウンは、自らが「日本人に伝道するよりも」自分と同じ信仰、同じ考えを持つ者を育てることを、「遥かに大なる」事業として、教育の目的として繰り返し塾で語った。日ごろから繰り返しこの言葉に接したと回想する井深は、どのように理解したのであろうか。

眼下の埋地「寿地区」の労働者や庶民から離れていくことを正当化する論理として、理解することが可能なのである。つまり、教育事業自体を優先し、社会経済的弱者にふれず、神学教育の中身は問わない、という、眼下の労働者を切り捨てる論理にも受け取れるのである。

植村正久は、S.R.ブラウンが教師・牧師の教育に重きを置く気風に関して、「これは、ブラオン氏が我が教会の堅実なる発展の為に貢献した第一である。」⁴⁴と、高く評価している。

その植村にとって、S.R.ブラウンからの警告として、次のような言葉が強く印象に残ったとされる。「ブラオン氏が常に我等に

警告したことがある。即ち『神は無知不学の徒を、その説教者として欲し給わぬ』“God does not want ignorances for his preacher”と云うことであった。」⁴⁵S.R.ブラウンが警告したとされる“ignorance”「無知」とは、何に關しての「知」であり「無知」であつたろうか。欧米の學問としての神學であつたのだろうか。

S.R.ブラウンの言葉が、少なくとも、隣り人に関する「知」も含んでいたとすれば、「寿地区」との關係は違つたものになっていたと思われる。

S.R.ブラウン自身は、すでに引用した手紙にあるように、バプテスト派宣教師J.ゴープルに対して、昼間労働者として働くことや、學歴がないことや、一流の人物でないということから宣教師の資格を疑い、輕蔑をあらわにしている。

一方で、S.R.ブラウン自身の理想の教師像を別の手紙から知ることができる。

「善良で、良識あり、教育もあり、りっぱな紳士で、内外人から尊敬をうけるばかりでなく、本国で卓越せるりっぱな人物ならば、いつでもこちらに派遣してください。そういう人物以外はお断りします。ミッション本部も、凡庸な人間がりっぱな宣教師になれると思つていないはずです。」⁴⁶

こうしたS.R.ブラウンの考える宣教師像・教師像が、折に触れて語られ、「横浜バンド」のメンバーの心に深く刻み込まれたであらうことは、想像に難くない。結果的に、「横浜バンド」が後にそれぞれミッションスクールの学校教育事業の指導者になったことを、「二十人のブラオンを造る」というS.R.ブラウンの事業の実現、とする井深のような見方もできるだろう。

問われなければならないことは、目と鼻の先で暮らす労働者から離れていく先の神学の中身である。それが「神学教育は誰のためのものか」という問いである。

(D)《排除》：問題と考えることの結論

本章では、何が問題と考えられるのか、をより詳しく説明した。

共通して言えることは、理想に反して、結果的にすべてが改革派・長老派に帰結してしまう点である。

S.R.ブラウンが、聖書翻訳、公会主義に基づく教会形成、神学教育の全ての指導者を兼ね、圧倒的な社会経済的な強者の立場にいたことを考えれば、S.R.ブラウンは問われなければならない。

そして、明治時代初期の横浜における「寿地区」とキリスト教の関係においては、《排除》の問題が指摘されなければならない。宣教における社会的経済的弱者の《排除》という視点を横浜キリスト教史は持つ必要がある。隣接する「寿地区」の労働者が横浜キリスト教史の中で全く語られずにきていることは、現在の問題である。高谷道男氏は『横浜バンド史話』の中で全くふれずにすまうことができたし、川島第二郎氏もJ.ゴープルが宣教した人々に視点が向かわず、翻訳した聖書訳の研究にとどまってしまった。

S.R.ブラウン以来の改革派・長老派宣教師そして横浜バンドを美化する以外に、問題点を「寿地区」の視点から批判的に提出することが必要と思われる。

結論《修復》：「寿地区」に学ぶ《対話への意思》

本稿は、日本キリスト教史の一断面として、「明治時代初期の横浜における埋地「寿地区」とキリスト教」というテーマで論じてきた。

地域の歴史や実際の地理に照らして《近さ》を、経済格差や書簡を読み解きながら《ねじれ》を説明し、そこから生じた疑問を、

具体的な事例をとりあげながら、《排除》の問題として指摘した。

教会一致運動としての公会主義という理想に反して、そもそも《対話》でなく《排除》の傾向が指導者であるS.R.ブラウンの行動を規定していたとすれば、その矛盾を正当化するのではなく、常にさかのぼって批判し、克服する努力を重ねていくことが具体的な営みとして求められるように思われる。

結論として、《排除》の論理が、再び現代において無批判に継承されることがないように、失われたものを《修復》する可能性を述べておきたい。

S.R.ブラウンや「横浜バンド」と反対に、埋地「寿地区」から学ぶという方向性を明確にする、という点である。

寿地区で聖書を読む、寿地区と共なる教会形成、寿地区から学ぶ神学、こうした方向性が、明治時代初期に失われた「寿地区」とキリスト教の関係性を《修復》する可能性を持つ。

これは、「寿地区」に学ぶ、社会経済的弱者との《対話への意思》と言い換えてもよいであろう。

最後に

現代において「日本基督教団神奈川教区 寿地区センター」の働きが、明治時代初期のキリスト教が決定的に欠いてしまった「寿地区」との対話の再開を果たし、《排除》によって失われたものを《修復》していると考えている。

たとえば、現在「寿地区」は、男性単身の高齢者・生活保護受給者の割合が急速に高まっている。彼らとの対話を個人で行うことは不可能かもしれないが、地区センターの働きにボランティアとして参加することによって、対話が可能になる。参加者がボランティアで学ぶことの可能性は大きい。

現在の地区センターの役割は極めて重要である。

【注】

- 1 P.365 『S.R.ブラウン書簡集』 高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
- 2 P.366 同上
- 3 P.1468 『日本キリスト教歴史大辞典』 教文館 1988
- 4 P.23 『磯子の水辺から—掘割川その復権』 掘割川の会 2001
- 5 Copyright (C) Alps Mapping K,K. All Rights Reserved. Copyright (C) CyberMap Japan Corp. All Rights Reserved.
- 6 P.485 『植村正久と其の時代』 第1巻 佐波亘 教文館 1938
- 7 P.483 『植村正久と其の時代』 第1巻 佐波亘 教文館 1938
- 8 P.110 『新島襄・本多庸一—日本の代表的キリスト者1』 砂川萬里 東海大学出版会1965
- 9 P.84 『井深梶之助とその時代』 第1巻 明治学院 1969
- 10 P.673 『植村正久と其の時代』 第1巻 佐波亘 教文館 1938
翻訳はP.209 『植村正久文集』 斎藤勇編 岩波書店 1939
- 11 P.7 「フェリス女学院草創期の秘話」 佐野誠吉 『あゆみ』 2003 第51号
フェリス女学院資料室
- 12 P.7 同上
- 13 P.482 『植村正久と其の時代』 第1巻 佐波亘 教文館 1938
- 14 P.295, 296 『S.R.ブラウン書簡集』 高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
- 15 P.482 『植村正久と其の時代』 第1巻 佐波亘 教文館 1938
- 16 P.280 『ヘボン書簡集』 高谷道男編訳 岩波書店 1959
- 17 P.49 『日本賃労働史論 —明治前期における労働者階級の形成—』 隅谷三喜男 東京大学出版会1955
- 18 P.377 『フルベッキ書簡集』 高谷道男編訳 新教出版社 1978
- 19 P.13 「フェリス女学院草創期の秘話」 佐野誠吉 『あゆみ』 2003 第51号
フェリス女学院資料室
- 20 P.306 『S.R.ブラウン書簡集』 高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
- 21 P.213 『ヘボン書簡集』 高谷道男編訳 岩波書店 1959
- 22 P.4 『磯子の水辺から—掘割川その復権』 掘割川の会 2001
- 23 P.1 『磯子の水辺から—掘割川その復権』 掘割川の会 2001
- 24 P.160 『S.R.ブラウン書簡集』 高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
- 25 P.324-326 『ジョナサン・ゴープル研究』 川島第二郎 新教出版社 1988
- 26 P.110 『図説 横浜キリスト教文化史』 横浜プロテスタント史研究会編 有隣堂 1992
- 27 P.39 『フルベッキ書簡集』 高谷道男編訳 新教出版社 1978
- 28 P.43 同上

-
- 29 P.242『横浜開港側面史』横浜貿易新報社編 歴史図書室 1979
30 P.242『横浜開港側面史』横浜貿易新報社編 歴史図書室 1979
31 P.124『横浜開港側面史』横浜貿易新報社編 歴史図書室 1979
32 P.353『横浜開港側面史』横浜貿易新報社編 歴史図書室 1979
33 P.9『横浜元町140年史』横浜元町資料館 2001
34 P.49『横浜の坂』小寺篤 経済地図社 1976
35 P.49『横浜の坂』小寺篤 経済地図社 1976
36 P.162『英学と宣教の諸相』小林功芳 有隣堂 2000
37 P.272『ジョナサン・ゴープル訳『摩太福音書』の研究』川島第二郎
明石書店 1993
38 P.146 同上
39 P.70『宣教師ルーミスと明治日本』有地美子訳 有隣新書 2000
40 P.258『ヘボン書簡集』高谷道男編訳 岩波書店 1959
41 P.293『S.R.ブラウン書簡集』高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
42 P.300『S.R.ブラウン書簡集』高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
43 P.465『植村正久と其の時代』第1巻 佐波亘 教文館 1938
44 P.466『植村正久と其の時代』第1巻 佐波亘 教文館 1938
45 P.466『植村正久と其の時代』第1巻 佐波亘 教文館 1938
46 P.194『S.R.ブラウン書簡集』高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965

【主要な参考・引用文献】

- 『分断されることへの抵抗 歴史の空白を埋める試み』下村優「社会委員会
通信」Vol.49 2002.5.28
『寿町の歴史をたどる 空白の歴史を埋める試み』下村優「ことぶき「なか」
だより」No.93 2002.10
『寿から見た「横浜バンド」』下村優「ことぶき「なか」だより」No.96
2003.4
『「横浜バンド」を歩く』下村優「ことぶき「なか」だより」No.97 2003.6
『寿から「横浜バンド」書簡を読む』下村優「ことぶき「なか」だより」
No.98 2003.8
『S.R.ブラウン書簡集』高谷道男編訳 日本基督教団出版局 1965
『ジョナサン・ゴープル研究』川島第二郎 新教出版社 1988
『ヘボン書簡集』高谷道男編訳 岩波書店 1959
『フルベッキ書簡集』高谷道男編訳 新教出版社 1978
『宣教師ルーミスと明治日本』有地美子訳 有隣新書 2000
『植村正久と其の時代』佐波亘 教文館 1938
『井深梶之助とその時代』明治学院 1969

-
- 『日本賃労働史論 ―明治前期における労働者階級の形成―』隅谷三喜男
東京大学出版会1955
- 『近代日本の形成とキリスト教』隅谷三喜男 新教出版社 1961
- 「あゆみ」2003 第51号 フェリス女学院資料室
- 『植村正久文集』斎藤勇編 岩波書店 1939
- 『ドクトル・ヘボン関連年表』石川潔 1999
- 『新島襄・本多庸一―日本の代表的キリスト者1』砂川萬里 東海大学出版
会1965
- 『日本キリスト教歴史大辞典』教文館 1988
- 『明治六年（1873年）横浜明細之全図』人文社
- 『明治十年（1877年）改正横浜分見地図』人文社
- 『横浜開港側面史』横浜貿易新報社編 歴史図書室 1979
- 『横浜元町140年史』横浜元町資料館 2001
- 『磯子の水辺から―掘割川その復権』掘割川の会 2001
- 『片隅が天である 現代への使信』渡辺英俊 新教出版社 1995
- 『英学と宣教の諸相』小林功芳 有隣堂 2000
- 『横浜の坂』小寺篤 経済地図社 1976
- 『ジョナサン・ゴープル訳『摩太福音書』の研究』川島第二郎 明石書店
1993
- 『横浜バンド史話』高谷道男＋太田愛人 築地書館 1981